

シンポジウム「大坂の学藝」趣旨説明

井上 克人

江戸中期、天下の台所としてかつてない隆盛をきわめた大坂。豊かな富を背景に好学の氣風が渦巻く中、幾人もの個性豊かな町人学者が生まれた。国学の下河辺長流、僧契沖、上田秋成、漢学の三宅石庵、中井甕庵、五井蘭州、富永仲基、中井竹山、同履軒、山片蟠桃、大塩中斎、経済学の草間直方、蘭学の橋本宗吉、緒方洪庵、福沢諭吉、天文学の間重富^{はざましげとみ}たちがその系譜である。同じ上方でも、京都の公家や僧侶の学問とは風を異にした庶民の学問と文化が花開いたのである。

彼らの学問にはほぼ一貫した思想が流れていた。すなわち、思弁的で抽象的な机上の空論を嫌い、あくまでも事実に基づき自分の目で冷徹に確かめたことしか信じない実証主義の精神、そして権威や教条や因習や定説にとらわれず、どこまでも経験を重んじ、客観的で理性的であろうとする経験的合理主義の考え方である。

江戸の学者の多くは、官学である儒学を為政者の学として理解し、幕府や大名に仕えることを目的に学問を修めたのに対して、大坂の町人学者の意識の根底には平等の思いがあり、封建の世にあつて身分にこだわらず、学問を堅苦しくは考えなかった。自らの本業を全うしながら、あくまでも自分自身を磨くために自由に学問に取り組んだのである。彼らの多くは利益を追う商人の出であり、その学問は実学であつた。ひたすら真理を求

め、実利を忘れ、お上の禁制をも恐れなかった。学問で職を求めようとはせず、名利のために学問をしたのではなかった。まさにそうあるべき純粹な学問のかたちがあるところにはあったのである。

彼らは現代の眼から見てもきわめて合理的で、地に足のついた「創見發明の説」を主張したが、いずれも大坂という土地においてこそ現れた町人学者であつたと言える。あたかも井原西鶴や近松門左衛門が大坂の町人の気風にふれてはじめてその人情味溢れた作品を残すことが可能であつたように。

大坂江戸掘に、和学者であり、歌人でもあつた下河辺長流（一六二七―一七八六）が住んでいた。大和の小泉の出身で、歌道に通じていたが、『万葉集』の註釈にあつたて、公家の因習と權威に固執した歌論を批判し、新説を打ち出した。水戸藩の徳川光圀の信望も厚く、『万葉集』註釈を頼まれるが、病氣療養の理由で、この仕事を契沖（一六四〇―一七〇二）に託す。

契沖は真言宗の僧侶として高野山で修行に励んでいたが、当時の高野山の事情に飽き足らず、仏者の世界の実情にも失望し、大坂和泉に隠棲していた。彼は長流に代わつて、『万葉集』の註釈を営々と推し進め、その学業は名著の誉れ高い『万葉代匠記』となつて結実する。契沖の註釈には二つの特質が挙げられる。一つは、彼の博覧強記である。歌の意味を確定するのに、じつにさまざまな書物を渉獵している。とはいつても、彼には確固とした方法意識があつた。これが二つ目の特質なのだが、「此書を証するには此書より先の書を以てすへし」、「此集を見るは、古の人の心に成りて、今の心を忘れて見るへし」といった立言からもわかるように、古典研究は古語や古書に沿つて解釈すべしという姿勢が貫かれていた。この徹底した実証的精神は、「古学とはすべて後世の説にかかはらず、何事も、古書によりてその本を考え、上代の事を、つまびらかに明らむる学問なり」（『初山踏』）と強調した本居宣長の国学にも通じていく。

さて時代は降り、享保年間になると、大坂は人口三三万に達し、全国の経済的中心としてその繁栄を誇つていた。この時期、町人の儒学の学校として「懷徳堂」、詩文の結社として「混沌社」が創設され、ともに大坂町人の教養を高めた。とくに「懷徳堂」は周知のように、儒者中井斂庵や三星屋武右衛門、道明寺屋吉左衛門、舟橋屋四郎右衛門、備前屋吉兵衛、鴻池又四郎ら「五同志」が協力し、道明寺屋吉左衛門の提供した土地（船

場の尼崎町)に、享保九年(一七二四)に開設された私塾である。

中井整庵は、宝永三年(一七〇六)に父親に連れられて播州の竜野から大坂に出てきた。十四歳だった。三宅石庵の塾に入門し、儒学を学んだ。石庵の学問の立場は「外朱内王」と言われたり、「鶴やま学問」と椰揄されたりしたが、朱子学・陽明学のいずれにも偏らず、自由闊達でかつ実行を重んじるところがあったので、大坂町人には殊のほか人気があった。

ところで「懷徳堂」の名は、整庵が『論語』から取ってつけたものであるが、この学舎の壁書には次のようなことが記されていた。

一、学問は忠孝を尽し職業を勤むる等之上に有之事にて候、講釈も唯右之趣を説す、むる義に候へば、書物不持人も聴聞くるしかるまじく候事。

但不叶用事出来候はゞ、講釈半にも退出可有之候。

一、武家方は可為上座事。

但講釈始り候後出席候はゞ、其の差別有之まじく候。

一、始て出席之方は、中井忠蔵(整庵)迄其断可有之候事。

但し忠蔵他行之節者、支配人道明寺新助迄案内可有之候。

以上

年十月

学問所行司

この条項からもわかるように、いかにも町人の学校にふさわしい自由な学風であった。どんな身分の人も、働きながら学べる。学問は武士のものと思われていた時代に、懷徳堂はまさに町人の学校であった。時には京都の古義堂から伊藤東涯に講義に来てもらうこともあった。

道明寺屋吉左衛門の三男で、彗星のように現われた天才少年、富永仲基(一七一五―一七四六)はここで石庵の門弟となるが、思想の発展を見るに、既存の思想を前提としてその超克を図る際に、自説をその思想体系の開祖の所説であるかのように装い、それを正当化しようとするという「加上の説」を唱え、仏教・儒教・神道など

伝統的思想のドグマ性を抉り出し、それを自由奔放に批判したことである。

懷徳堂は開設当初、経学中心であったが、五井蘭州が責任者となったとき、「余力に詩賦文章、或は医術をも心懸候人へ、内証にて講じ聞せ、或は会読に致し、或は詩会文会等致し候事は格別之義と存候」と規定が改められ、懷徳堂の教育の程度は急速に高まっていた。

蘭州の弟子で、中井甕庵の子、竹山、履軒の兄弟の存在も大きいものがあつた。竹山が塾長のとき、学風は頂点に達し、それまでの「武家方は上座たるべき事」という壁書は、「書生の交は貴賤貧富を論ぜず、可為同輩事」と改められた。このように大坂の町人は、学問にもいよいよ自信を深め、武士を中心とする封建社会の身分制度にとられない自由な気風を体得していく。その竹山のもとへ、佐倉藩主の堀田正邦も弟子入りしている。まさに懷徳堂は黄金時代を迎え、門弟も増え、江戸の昌平齋をしのぐといわれた。

懷徳堂学派は反徂徠の立場を標榜し、「吾等は林氏にあらず、山崎にあらず、吾が一家の宋学なるのみ」という竹山の言葉が示すように、独自の朱子学であつた。その独自性の第一は、『中庸』を重んじる経学にあつた。特に履軒は『中庸』に説く「誠」を強調し、それは『論語』の「忠信」、『孟子』の「敬」とその精神は同じであるとする。第二は「格物窮理」を重視する学風である。これは蘭州から竹山・履軒に継承され、後に洋学受容の基盤となっていく。この「格物窮理」の実証的精神が、町人山片蟠桃（二七四八―一八二二）に受容され、天文学と結合すると、懷徳堂にもやかに一進生面を發揮する。第三は経世済民論であり、中井竹山の『草茅危言』が有名である。

山片蟠桃は播磨国の商家に生まれ、十三歳で大坂の米問屋・升屋に丁稚に入り、若くして番頭となり、傾きかけていた升屋を建て直し、また財政危機に瀕していた仙台藩を再興した敏腕商人としても知られる。彼は懷徳堂で麻田剛立から天文学を学び、晩年、その集大成として全十二巻からなる『夢の代』を上梓する。これは享和二年（一八〇二）、蟠桃五十五歳のときに執筆された『宰我の償』を加筆、推敲されたもので、現在その写本全六巻が、大阪市立博物館に、間重富（二七五六―一八一六）らの天文資料を中心とする「羽問文庫」の一部として保存されている。随所に懷徳堂の師、中井竹山の朱書きが添付されている。

『夢の代』の内容は、天文学だけに限らず、地理学、歴史学、経済学、哲学、自然科学と多岐にわたっている。とりわけ驚くのは、蟠桃がこの時代にすでに地動説や無神論を唱えている点である。羽間文庫本には記載されていないが、完本の『夢の代』の最後は次の二首の句で結ばれている。

地獄なし極楽もなし我もなし ただ有るものは人と万物

神仏化物もなし世の中に 奇妙不思議のことは猶なし

蘭学が盛んであった大坂は、天文学の分野でも進歩的な町人学者を輩出している。今挙げた間重富もそうで、当時の幕府の天文方がまだ東洋的な占星術にとらわれていたのとは対照的に、重富は、西洋の観測術に基づいて月食の様子を記した『月食観測記録』を残しており、実際の観測には自作の測定器を使ったといわれる。のちにその有能さが認められ、幕府の天文方に登用されることになる。

最後に、もう一人忘れてはならないのは、博物学者、蔵書家として知られた木村兼葭堂（一七三六—一八〇二）であろう。彼は現在の北堀江付近で酒造業を営みながら、学問や芸術をこよなく愛し、自宅に蔵書や地図、植物標本などのコレクションを公開する私設図書館兼博物館のようなサロンを開いて、向学心に燃えた町人や全国の人々と交流した。自らも絵を描き、文章や詩を書き、漢学や蘭学、本草学にも造詣が深かった。いわばディレッタント的存在であった。

以上のように、封建社会の中で、幕府が経済特区として認めた大坂だけは豊かな資本主義の世を謳歌し、自由な風潮があった。学問のジャンルにこだわらず、広い視野をもって何でも学び、自由にももの考える合理的で実証的な土壌は近世の大坂という町にもとあったものである。

どんな思想家であれ、その思想が形成されていく過程で、彼らを育んだ土地の風土性、土着性が彼らの意識の根底に深く浸透していることは無視できない。今回のテーマ「大坂の学藝」も、近世の大坂という地において町民や庶民が共通に呼吸していた自由でおおらかな（空気）に触れることによって、今日にも通用する学芸の真のあり方を改めて再認識するために企画された。

なお、本稿執筆にあたり、左記の資料および記事を多少参考にさせていただいた。記して感謝を表したい。

大谷晃一『大阪学』（新潮文庫 一九九七年）

大谷晃一「純粋な学問のかたちたちがそこにある——大坂の町人学者——」（『大阪人』55巻所収、「ミートミュージアム9

大阪市立博物館コレクションを訪ねて」（加藤法子取材・大阪歴史博物館企画協力）二〇〇一年九月）

（関西大学教授）